

# 伝統的ホロコースト史学とJ.-C. プレサック 「コード言語」説と「目撃証言」の信憑性の評価

加藤 一郎\*

## La tradicia holokaŭsta historiografio kaj J.-C. Pressac la teorio de “koda lingvo” kaj la kredindeco de “vidantaj testamentoj”

KATO Içiro

Resumo: Ĝis la nuna tempo la tradicia holokaŭsta historiografio, kiu rekte frontis kontraŭ la manko de la fizikaj kaj dokumentaj atestaĵoj, skribis la historion de Holokaŭsto, bazitante sin sur la teorio de “koda lingvo” kaj “vidantaj testamentoj”. La franca studento, J.-C. Pressac kritikis tiu ĉi metodologion de la tradicia holokaŭsta historiografio. Sed, aperis multaj kontraŭdiroj en liaj verkoj, ĉar li klopodis eviti la revizionistan konkludon kaj defendi la holokaŭstan ortodoksan historion.

### はじめに

伝統的ホロコースト史学 = ホロコースト正史は、ホロコーストの具体的局面を記述するにあたって、主として、生存者の「目撃証言」、SS隊員の「自白」に依拠してきた。これに対して、歴史的修正主義的な立場を取る研究者は、技術的、化学的、科学的、法医学的観点から、ホロコーストの諸局面、とりわけ強制収容所に対する現場検証に力点を置き、ホロコーストの象徴ともいえる「大量ガス処刑」の物理的技術的不可能性を立証してきた。伝統的ホロコースト史学は、戦後数10年にわたって、ホロコーストの技術的・化学的・法医学的な検証を怠ってきたために、こうしたホロコースト修正主義者からの問題提起に答えることができず、「このような大量虐殺が技術的にどのように可能であったのかを自問する必要はない。それは起こったから技術的に可能であったのである」(レオン・ポリャーコフ、ヴィダル・ナケなど34名のフランスの歴史家による1979年の声明)というきわめて不可解な、非学問的姿勢をとらざるをえないところまでおいこまれてしまった。

こうした状況の中で、フランス人研究者J.-C. プレサックは、1989年に、『アウシュヴィッツ：ガス室の技術と作動』<sup>1)</sup>、1993年に、『アウシュヴィッツの焼却棟・大量殺戮装置』<sup>2)</sup>、1994年に同書のドイツ語版<sup>3)</sup>、1994年に、同書の英訳短縮版(ペルトとの共著)<sup>4)</sup>を発表した。当初、とくに1989年の大著『アウシュヴィッツ：ガス室の技術と作動』は、ホロコースト修正主義に対する

\* かとう いちろう 文教大学教育学部

「決定的な反駁」として高く評価された。「目撃証言」や「自白」だけではなく、焼却棟の図面などドイツ側の文章資料を大量に渉猟した上で、「大量ガス処刑」とくに「殺人ガス室」の物理的・文書資料的証拠を発見したというのである。しかし、ホロコースト正史派による喧伝にもかかわらず、プレサックが発見することのできたのは、直接的な証拠ではなく、何とでも解釈できるような、根拠薄弱な「犯罪の痕跡」、「筆のすべり」に過ぎないことが次第に明らかとなっていった<sup>5)</sup>。

本小論の目的は、修正主義者と同じ土俵の上に立って、修正主義を批判しようとしたこのプレサックが、伝統的ホロコースト史学の研究方法の骨格ともいえる、「コード言語」説（「婉曲語法」）と「目撃証言」への依拠に対して、どのような姿勢をとっているのかを明らかにすることで、プレサックも含めたホロコースト正史の崩壊がどの程度まで進行しているのかを検証することである。

### 1. 「コード言語」説をめぐって

伝統的ホロコースト史学の典型ともいえるコーゴン、ラングバイン、リュッケル編『ナチスの大量殺戮』<sup>6)</sup>は、ホロコーストに関する文書資料について、次のように述べている（以降、強調下線は引用者）。

本書に言及されている主要な事実についてのもっとも重要な典拠資料は、同時代の文書資料である。ナチス体制は最終的な勝利を信じることを要求していたので、公式資料の破棄は、ドイツの崩壊の最後の瞬間まで延期されていた。このために、戦勝国側は、犯罪を立証することのできるような、驚くほど大量の証拠を発見した。しかし、極秘命令の多くは、その作戦が終了するたびに組織的に破棄されてきたので、失われている。<sup>7)</sup>

つまり、「ユダヤ人迫害」や「ユダヤ人移送」などホロコーストの背景を描く典拠資料となるドイツ側文書資料（たとえば、「ニュルンベルク法」、収容所の建設命令、ユダヤ人の移送記録など）は存在するが、「ユダヤ人絶滅命令」、「殺人ガス室」などホロコーストの具体的局面、犯罪的局面を文字どおり立証しているようなドイツ側資料（たとえば、「殺人ガス室」の建設命令、チクロンBやディーゼル排気ガスを使ったユダヤ人大量殺戮命令）は「失われている」というのである<sup>8)</sup>。

「極秘命令の多くは、その作戦が終了するたびに組織的に破棄されてきたので、失われている」という説にはまったく根拠がない。だから、そもそも、そのような「極秘命令」が存在していたのかどうかを問題としなくてはならないのであるが、伝統的ホロコースト史学は、「殺人ガス室」や「大量ガス処刑」を立証の必要のない「歴史的事実」としているために、そのような基本的問題は回避してしまっている<sup>9)</sup>。「殺人ガス室」や「ユダヤ人の大量殺戮」などのホロコーストの具体的局面、犯罪的局面を立証するドイツ側文書資料が存在しないという事態に直面して、伝統的ホロコースト史学が採用した第一の方法は、「コード言語」説、「婉曲語法」説であった。

コーゴンたちの『ナチスの大量殺戮』は次のように述べている。

本書で引用されるナチス側の文書は、非常に重要である。それらの文書は、体制の諸決定、その執行、その結果を明らかにしているからである。しかし、これらの文書は素人があつかうには厄介なものになっている。関係者が特別な言語を使っているからであ

る。Sonderbehandlung (特別措置), Sonderaktion (特別行動), Umsiedlung (移送, 移住), Evakuierung (疎開), Endlösung der Judenfrage (ユダヤ人問題の最終解決) のような、一見無害に見えるコード言語の単語が使われていた。システムは、その本当の意図を隠すようなかたちで作られていた。コード言語を使った表現を文字通りに受けとってしまうことは、たんにその本当の意味を隠してしまうのに役立つにすぎない。だからその裏を かいて、 解読しなくてはならない<sup>10)</sup>。

ナチス・ドイツは自分たちの犯罪的意図や実行行為を「隠匿」、「カモフラージュ」するために、「コード言語」、「婉曲語法」を使ってきた。このために、「コード言語」、「婉曲語法」を使って書かれた文書資料の解読は、「素人」には「厄介」な代物であるので、自分たちホロコースト史家だけが、「暗号解読官」として、その文書資料を解読し、そこに隠蔽されている犯罪的事実を明るみに出すことができるというのである。

また、アーヴィング・リップシュタット裁判を扱った『アウシュヴィッツ事件』<sup>11)</sup> という最新の研究書をあらわしたベルトも次のように述べている。

ダヴィドフスキは青写真と書簡を研究したとき、最終解決での焼却棟の役割が、一見無害に見えるコード言語の単語で隠蔽されていることを発見した。絶滅施設をさすときには、焼却棟は収容者の Sonderbehandlung (特別措置) のための Spezialeinrichtungen (特別施設) と呼ばれた。「特別措置」という用語は殺人をさしていた (注 161, See Kogon, Langbein, and Ruckerl, eds. Nazi Mass Murder, 5ff).<sup>12)</sup>

最新の研究書を著したベルトでさえも、注 161 の参考文献にコーゴンたちの『ナチスの大量殺戮』をあげているように、「コード言語」説を採用していることがわかる。さらに、引用文中に登場するダヴィドフスキ (Roman Dawidowski) は、カチンの虐殺がナチス・ドイツの仕業であることを「立証」したソ連側調査報告に署名したアカデミー会員ブルデンコと総主教ニコライがやはり署名している、1945年のアウシュヴィッツに関する報告を作成したソ連・ポーランド調査委員会に協力した法医学専門家なのである。最新のホロコースト正史派の研究者でさえも、半世紀前のニュルンベルク裁判の水準にとどまっているか、あるいは、意図的にそれに忠実であろうとしているようである。

オリジナルの第一次資料に登場する表現や単語の解釈を文字通りに解釈するのではなく、ホロコースト正史派の「暗号解読官」たちだけが恣意的に解釈することが許されているのは、歴史学のなかでも、伝統的ホロコースト史学だけであろう。

これに対して、プレサックは、こうした伝統的ホロコースト史学の土台となっている「コード言語」説を手厳しく批判している。

ある歴史家たちは、第三帝国の犯罪的側面は「カモフラージュ」的手段を使って実行されたという考え方を利用して、まったく正当化できないような一般化を行なっても、それには根拠があると自説を正当化してきたようである。このような歴史家たちは、「カモフラージュ」説を使って、乏しい知識を確実なことにしてしまうことができ、混乱した思考を介して、事態をいっそう混乱させてしまった。疑いのある施設は、「カモフラ

ジユ」説を介して、「犯罪的という烙印」を押された。シャワー室や害虫駆除・殺菌消毒ガス室は、殺人ガス室のカモフラージュであるというのである。もしも、発見された資料が、この疑いのある施設が実際に、その所定の目的で、正常に使用されていたことを証明すると、「カモフラージュ」説の第二の局面が姿を現した。すなわち、「コード言語」説であり、ある研究書では、欠くことのできない要素となった。この説によると、正常に使用されていたと述べている資料は、まさに「カモフラージュ」された場所のことをさしているのだから、「コード言語」で書かれているはずであるというのである。だから、ビルケナウ焼却棟 と の死体安置室1は、殺人ガス室の機能を果たしていた、死体安置室2は 脱衣室の機能を果たしていた、とそれぞれ「解読される」というのである（「死体安置室3」は、もしもまったく明瞭な呼称を持つ部屋に分割されなかったとしたならば、どのように解読されるのであろうか）。このような歴史学の「方法論」は、それが無知であるがゆえにますます頑迷となり、客観的な研究の前に立ちはだかかってきた。なぜならば、その施設の年代的進化、建築学的進化、ひいては、実際の建物の配置についてさえも無知であるがゆえに、安易な方法の採用を許してきたからである。「カモフラージュ・コード言語」説は、さらに、第三の説、すなわち、三部作の最後、「秘密」説で補強される。その説を使えば、自分自身の知識が欠けている理由を、犯罪を行なったとされる人々が「秘密裏」にそれを行なったからであると非難することで説明できるからである。<sup>13)</sup>

プレサックは、「カモフラージュ」説・「コード言語」説・「秘密」説にもとづく伝統的ホロコースト史学を、「まったく正当化できないような一般化を行なっても、それには根拠があると自説を正当化」すること、「乏しい知識を確実なことにしてしまうこと」、「無知であるがゆえに、安易な方法の採用を許してきた」こと、「自分自身の知識が欠けている理由を、犯罪を行なったとされる人々が『秘密裏』にそれを行なったからであると非難すること」と痛烈に批判しているが、この批判はきわめて説得的であり、ホロコースト修正主義の立場から見ても、非の打ち所がない。事実、彼は『技術と作動』の中で「12月17日、収容所ゲシュタポは保安上の理由から、(作業現場30に40名から50名いた)民間労働者のあいだでの「特別行動」をはじめた(実際には、前日に始まっていただろう)。[注意：この文脈での「特別行動」という用語は、特別なカテゴリーの人々に対するチェックと尋問を意味しており、労働適格者の選別とそれ以外の人々のガス処刑とは関係がない]」<sup>14)</sup>と述べている(ただし、彼自身は、「犯罪の痕跡」の分析の中で「コード言語」説を使ってしまっているが、このことは、「コード言語」説・「カモフラージュ」説という伝統的ホロコースト史学の方法を痛烈に批判しているプレサックでさえも、ホロコースト正史の枠組みを守るためには、この方法にうたえるしかないと示している)。

### 1.1. ハイドリヒあてのゲーリング書簡とヴァンゼー会議の解釈

プレサックが「コード言語」説批判に忠実であることを示しているのは、ヴァンゼー会議の取り扱いである(以下、表の左側は伝統的ホロコースト史家の記述、右側はプレサックの記述である)。

伝統的ホロコースト史学は、彼ら独自の「コード言語」説にしたがって、「ユダヤ人問題の全面解決」という用語が登場するゲーリングからハイドリヒあての書簡(1941年7月30日)、および

伝統的ホロコースト史家の記述	プレサックの記述
<p>「ユダヤ人問題の解決」,「ユダヤ人問題の最終解決」,「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決」という用語を,ナチス支配化の地域のすべてのユダヤ人の物理的絶滅を意味するべきものとして理解すべきなのは,いつの時点からか,ということについては意見が分かれている. . . .</p> <p><u>「最終解決」という単語を物理的絶滅という意味で理解すべきであるという時点は1941年7月からのことであると考えている人々もいる.</u> この日,帝国元帥ヘルマン・ゲーリングは,国家保安本部SD長官ラインハルト・ハイドリヒSS集団長に次のように書いている. . . .</p> <p>この任務を調整するために,ハイドリヒはベルリンのヴァンゼーに会議を招集した.<sup>15)</sup></p>	<p>1月20日,「ヴァンゼー会議」と呼ばれる会議がベルリンで開かれた.ユダヤ人を東部地区に移送するという作戦が計画され,そこでは,労働によって幾分かユダヤ人が『自然に』清算される可能性が含まれていたとしても,<u>工業的な大量清算について語った者は誰もいなかった.</u>この会議に続く日々,週,アウシュヴィッツ建設局は,<u>工業的な大量清算という目的のための施設を計画することを要請する呼び出し,電報,書簡をまったく受け取っていない.</u><sup>16)</sup></p>
<p>この手紙[ゲーリングの書簡]を受け取って,ハイドリヒは絶滅過程の手綱を握った.まもなく,彼は自分の全権を行使するようになった.<sup>18)</sup></p> <p>「最終解決」のニュースは,しだいに役所の職員たちに漏れていった.その知識は,一度に全部の職員に行き渡ったわけではない.ある人がどのくらい知っているかは,その人が絶滅作戦にどのくらい近いかということと,絶滅過程の本質をその人がどのくらい洞察できるかに依っていた.<u>しかし,その理解が記録に残されることはめったになかった.</u>官僚は,移送の問題を取り扱わなくてはならないときには,ユダヤ人の「移住」という言葉を使い続けた.公式の書簡では,ユダヤ人はまだ『移動』していた.彼らは,「疎開し」,「移住した」.また「国外移住し」,「いなくなった」.こういった言葉は,<u>純真さの産物ではない.それは心理的抑圧の便利な手段だった.</u><sup>19)</sup></p>	<p>1942年1月20日:東部地区へのユダヤ人の移送に関するベルリンでのヴァンゼー会議<sup>17)</sup></p>
<p>脚注の中で,<u>ノルテは,ユダヤ人問題の最終解決を話し合ったとされるヴァンゼー会議は開かれなかったという否定派の説に同調していることを明らかにしている.</u> . . .ノルテは,歴史家論争の中で否定派をパートナーとすると宣言することで,否定派を事実上合法化した.ホロコーストに関して,<u>意見の雰囲気が変わり始めたようであった.</u><sup>20)</sup></p>	

「ユダヤ人問題の最終解決」という用語が登場するヴァンゼー会議議事録（1942年1月20日）を重視し、とくに、ヴァンゼー会議において「ユダヤ人の物理的絶滅」が決定されたと論じてきた。コーゴンたちやヒルバークもこの見解を踏襲している。

しかし、1980年代に入ると、ホロコースト正史派の研究者のあいだでも、ユダヤ人絶滅決定に関する意図派と機能派との論争もふまえて、ヴァンゼー会議の歴史的比重はかなり低くなってきている。

ブレサックの見解もこうしたホロコースト正史派の動きを反映しており、ペルトも、その著作がナチス・ドイツのユダヤ人政策を対象としているものでないだけに、ヴァンゼー会議にはほとんど触れていない。それどころか、引用文にあるように、ヴァンゼー会議について否定的なホルテや修正主義者の見解を紹介している。このことは、修正派はもちろんのこと、正史派にとっても、「『ヴァンゼー』はもはや『ヴァンゼー』ではない」（フォーリソン）ことを示している。

### 1.2. アウシュヴィッツへのチクロンBの搬送の解釈

ブレサックが、「コード言語」説を放棄したのであれば、論理的には、この「コード言語」説にもとづく伝統的ホロコースト史学の解釈=ホロコースト正史への批判に行き着くはずである。しかし、ホロコースト正史派としてのブレサックは、この論理的結論（すなわち、ホロコースト修正派の結論）に行き着くことを何とか回避するために、奇妙な解釈、非論理的な解釈を案出せざるをえなくなっている。このブレサックの「苦闘」のあとが典型的に見られるのが、アウシュヴィッツへのチクロンBの搬送という事実の解釈である。

<p>デッサウのアシュカナシエンシュトラッセ50aにあるデッサウ砂糖・化学工場が、ヘッセン州フリードベルクにあるドイツ害虫駆除会社（短縮してデゲシュ社）にかわって、強制収容所にチクロンBを供給した。収容所では、この製品は、表向きは、害虫駆除剤として使われた。SS経済管理本部からアウシュヴィッツ収容所あての1942年7月22日の電報には、「発生した疫病を鎮圧するために、ガス処理による収容所の害虫駆除用の必要資材を搬送するための5トン・トラックをデッサウからアウシュヴィッツに急いで派遣する許可がでている」とある。</p> <p>1942年8月26日、管理本部は別の同じような電報をアウシュヴィッツに送っているが、それは、「特別措置用の資材をつみこむために、トラックをデッサウに急いで派遣する許可がでている」という別の言い回しとなっている。</p> <p>最後に、1942年10月2日に、管理本部がアウシュヴィッツに送った電報は、「ユダヤ人再定住用の資材を積み込むために、トレーラーつき</p>	<p>1942年8月に収容所に蔓延していたチフスを鎮圧するために、病気の媒介者であるシラミを駆除しなくてはならなくなった。もっとも効果的な害虫駆除剤はチクロンBであり、それなしでは、病気を根絶することはできないであろう。「収容所封鎖」の前夜、「発生した疫病を鎮圧するために、ガス処理による収容所の害虫駆除用ガス」を集める目的で、5トン・トラック〔公式には4.5トントラック、積載量は道路上で4950kg、道路外で4100kg、容積約20m<sup>3</sup>〕をデッサウのチクロンB製造プラントに派遣する許可が、無線で与えられた。7月29日、「殺菌駆除に緊急に必要なガス」を積み込むために、もう1つのトラックをデッサウに派遣する許可が与えられた。この2つのトラックで、1kgのチクロンB缶が選ばれていたとすると、最大4000から5000個の1kg缶を運んできたことであろう。8月26日、チクロンBがまったく無くなったか、不足していたので、ルノー・トラック（3.5トンのAHNであろう）が、今度は「特別</p>
---	--

<p>の5トン・トラックがデッサウに向かい、そして戻ってくる許可がでていること」というように理由づけて、この搬送を許可している。</p> <p>ポーランド司法当局の要請で行なわれた、3組の化学的分析は、収容所解放後に発見された多くの物品が<u>毒ガス</u>にさらされていたことを明らかにしている。<sup>21)</sup></p>	<p>措置用の資材」を積み込むために、デッサウに派遣された。10月2日、疫病のピークは9月であったが、まだ依然として流行していたので、収容所は、「ユダヤ人再定住用の資材」を要求した。最後に、1943年1月7日、ふたたび流行したチフスを鎮圧するために、もう1つのトラックが「殺菌駆除資材」を求めてデッサウに派遣された。これら5つのトラック搬送許可は、この種の運送に触れている唯一のものである。<u>それは、チクロンBの2つの異なった使用法を反映している。</u><sup>22)</sup></p> <p>ヘスは収容所の不衛生な状態をヒムラーから隠すことに成功したが、チフスは蔓延していた。ヒムラーが出発してから1週間のうちに、事態は破局的となった。7月23日、収容所は完全な隔離状態に置かれた。あらゆるものが即座に殺菌駆除されなくてはならなかった。個人の所有物、バラック、建物、作業場。数トンのチクロンBが収容所の救済に必要であった。大量のチクロンBを入手する唯一の方法は、経済管理本部の手を借りることであった。ヒムラーをだましたことを認めたくなかったのが、アウシュヴィッツのSSは疫病が流行し始めたのは、ヒムラーが去ってからのことであると説明した。7月22日、ベルリンは2トン半のチクロンBを積んだトラックの出発を許可した。1週間後、第二のトラックが出発した。しかし、これでも不足であった。</p> <p><u>8月20日頃、疫病はまだ猖獗をきわめていたが、チクロンBの蓄えは消えていた。アウシュヴィッツ当局は、状況をコントロールすることができないことを意味してしまうので、これ以上多くのシアン化水素を注文することをためらっていた。そのとき、誰かが、ユダヤ人のガス処刑に言及することによってチクロンBの購入を正当化するというアイデアを思いついた。経済管理本部の高官は、ユダヤ人が殺虫剤によって殺されていることを知っていたが、どれほどの毒が必要であるのかは知らなかった。事実は、1000名の移送者を殺すには、わずか4kgの</u></p>
---	---

	<p>シアン化水素が必要なだけであった。ガス室での作業に必要な量の3000%も水増しすることによって、SSはそこから95%を殺菌駆除用に汲み上げたのである。トリックはうまくいった。8月26日と9月14日、ビルケナウでの不適格者の清算を意味する「特別措置」「特別行動」のために、大量のチクロンBを購入することが許可された。<sup>23)</sup></p>
--	--

ホロコースト正史では、害虫駆除剤チクロンBが「大量ガス処刑」のために使用されたことになっている。ドイツ側資料のなかで、このチクロンBがアウシュヴィッツに搬送されたことを具体的に記録しているのは、1942年夏から1942年末あるいは1943年初頭のあいだの5回もしくは6回のトラック搬送許可であった。そして、そのチクロンBの使用目的は、「害虫駆除用資材[ガス]」、「殺菌駆除に緊急に必要なガス」、「特別措置用の資材」、「ユダヤ人再定住用の資材」、「殺菌駆除資材」となっていた。

コーゴンたちの『ナチスの大量殺戮』は、「特別措置」＝「ガス処刑」、「ユダヤ人再定住」＝「ユダヤ人絶滅」と解釈する「コード言語」説にしたがって、これらのトラックが搬送したチクロンBが「ユダヤ人の大量ガス処刑」に使われたかのような印象を作り出そうとしており（「収容所では、この製品は、表向きは、害虫駆除剤として使われた」）、さらに、「収容所の解放後に発見された多くの物品が毒ガスにさらされていた」と付け加えることで、その印象を強めようとしている。

これに対して、プレサックは、アウシュヴィッツへのチクロンBの搬送が、チフスが蔓延していた時期に行なわれていたこと、「ユダヤ人の大量ガス処刑」だけに使うにすれば、その量が膨大すぎる（「3000%の水増し」）ことを正確に理解している。そして、アウシュヴィッツにチフスが蔓延している時期に、害虫駆除剤であるチクロンBが大量に注文されていたという事実を、何の先入観も持たずに、ごく自然に解釈すれば、このチクロンBは害虫駆除用に使われたと結論するのが論理的であることも自覚していたと思われる。

しかし、この論理的結論を認めてしまえば、ホロコースト正史の解釈が崩壊することになる。このために、プレサックは、「コード言語」説に対する先の批判を棚上げにしておいて、ここでは、「特別措置」＝「大量ガス処刑」、「ユダヤ人の再定住」＝「ユダヤ人絶滅」という「コード言語」説を受け入れることで、「殺人ガス室」の存在と「大量ガス処刑」の信憑性を確保すると同時に、「ガス処刑」目的だけで大量のチクロンBが搬送されているという矛盾をとりつくり、さらに、当時のアウシュヴィッツではチフスが蔓延していたという事実と調和させるために、次のような論理を考え出したのである。

アウシュヴィッツ収容所当局はチフスの蔓延を防ぐために大量のチクロンBを必要としていた。

しかし、これ以上のチクロンBを発注することで、自らの無能力が露呈してしまうことを恐れていた。

幸いなことに、中央のSS経済管理本部は、チクロンBが害虫駆除用にどれほど必要である

か、「ガス処刑」用にどれほど必要であるか知らない。

だから、アウシュヴィッツ収容所当局は「ユダヤ人の大量ガス処刑」のためとして、チクロンBを発注すればよいというアイデアを思いついた（「特別措置用の資材」、「ユダヤ人再定住用の資材」）。

このトリックは成功し、SS経済管理本部は、「特別措置用」、「ユダヤ人再定住用」のチクロンBの搬送を認めた。

しかし、プレサックの論理のうち、文書資料的な根拠があるのは、SS経済管理局が、特別措置用、ユダヤ人再定住用のチクロンBの搬送を認めた だけであり、 から はプレサックの憶測にすぎず、その憶測すらも、SS経済管理本部は「ガス処刑」用にチクロンBがどれほど必要か知らなかったなどという非論理的な空想を前提としている。「コード言語」説を放棄してしまえば、ホロコースト正史の解釈が崩壊してしまうことを自覚していながら、なんとか、ホロコースト正史の解釈の枠組みを擁護しようとするプレサックの心理的、論理的葛藤＝「苦闘」がうかがえる。

## 2. 「目撃証言」の信憑性の評価をめぐる

「殺人ガス室」や「ユダヤ人の大量殺戮」などのホロコーストの具体的局面、犯罪的局面を立証するドイツ側文書資料が存在しないという事態に直面して、伝統的ホロコースト史学が採用した第二の方法は、SS隊員や囚人の「目撃証言」や「自白」を、その信憑性を検証することなく、そのまま採用することであった。コーゴンたちの『ナチスの大量殺戮』は次のように記している。

実行犯たちの陳述は、事実を否定していないだけでなく、事件を詳細に記述しているものもあるために、とくに重要である。犠牲者についていえば、自分たちの目でガス室での殺人を目撃し、その後生きのびて、その話を伝えることができた人々はごく少数である。ガス室に運ばれた人々のほぼ全員がそこで殺されてしまったからである。しかし、絶滅センターでは、責任を負うSS隊員が少数の囚人を選び出していた。彼らは、すぐにガス処刑されてしまうかわりに、絶滅作業に参加させられ、特別労務班というかたちで仕事をこなしていた。こうした囚人の中には、生きのびた人々、逃亡に成功した人々、殺される前に、殺人システムがどのように稼働したのかを記したノートを地中に埋めることができた人々がいた。<sup>24)</sup>

事実、コーゴンたちの『ナチスの大量殺戮』はいうまでもなく、「ユダヤ人迫害」や「ユダヤ人移送」については膨大な第一次資料にもとづいてその実態を解明したヒルバークの『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』も、こと「殺人ガス室」や「大量ガス処刑」を記述するにあたっては、もっぱら、ヘスやブロードといったSS隊員の証言、ミュラーやニーシュリといった囚人の「目撃証言」に依拠してしまっている。

これに対して、プレサックは、目撃者の話だけに依拠する「絶滅の歴史」叙述を次のように批判している。

この歴史は、大半が証言にもとづいており、その証言は時代の雰囲気に応じて集められたものであり勝手な真理に適合させるために切り捨てられたり、不均等な価値を持つ少数のドイツ側資料と混ぜ合わされたり、互いに関係を持っていなかったりする。…そしてときとともに変化してしまうような人間の記憶にもとづくものよりも脆弱ではない真理を確定するために、本物の歴史研究に費やされるべきであろう。

「伝統的な」歴史家は、フォーリソンに「膨大な証拠」を提供したが、それは実質的にすべてが、SS隊員、生き残った囚人、特別労務班員からの証言、すなわち人間の証言にもとづいていた。しかし、人間の証言は脆弱である。それは信用できないし、フォーリソンが求めたのは、具体的な歴史的証拠、議論の余地のない、反駁の余地のない資料にもとづく証拠であった。<sup>25)</sup>

司法制度においては、殺人などの犯罪を立証するさまざまな種類の証拠の重要度は、物的・物理的証拠、文書資料的証拠、目撃証言の順に低くなっていく。目撃証言の重要度が一番低いのは、人間の記憶は不完全で、外から（たとえば、事件後の報道）の影響を受けやすいものだからである。プレサックもこのごく一般的な常識を理解しており、目撃証言だけでもとづくホロコースト正史を不完全なもののみなしている。以下では、物的・物理的証拠、文書資料的証拠がとぼしい2つの事例を取り上げて、伝統的ホロコースト史学と、プレサックがこの事例をどのように処理しているのを検証しておこう。

### 2.1. 焼却棟 での「ガス処刑」

伝統的ホロコースト史学は、SS隊員の供述や「自白」、生存者の「目撃証言」に依拠して、アウシュヴィッツ・ビルケナウの「殺人ガス室」や「大量ガス処刑」について記述してきた。とくに、その傾向は、中央収容所の焼却棟 について顕著である。プレサックによると、「焼却棟 ， ， とは異なって、焼却棟 に関するドイツ側資料はきわめて少ない。このために、その死体安置室で殺人ガス処刑が行われた証拠を正式に確定することはできない」<sup>26)</sup>からである。もちろん、物的証拠、法医学的証拠、文書資料的証拠が乏しい場合に、事件を復元するにあたって、自白、供述、目撃証言を利用することはありうる。しかし、その場合には、自白、供述、目撃証言の信憑性を検証することが必須の大前提であろう。

<p>この直後、焼却棟に隣接する窓のない部屋「死体安置室」と呼ばれていた がガス室として使われることになった。2つのドアはガス気密で、天井には穴が開けられて、そこからチクロンBが投入され、換気システムが備えられた。この部屋は非常に大きかった。長さ16.8m、幅4.6mであり、面積は77.8㎡、もしくは、835平方フィートに近い。中断はあるが、これは、<u>1941年秋から1942年10月まで使われた。</u></p>	<p>ルドルフ・ヘスは、焼却棟 の死体安置室で行なわれ、彼もその場にいた、[900名のロシア軍捕虜の]最初の処刑の1つについて記述している(164頁)。2つの事柄があり<u>そももないことである。900名が78.2㎡の部屋に押し込まれたこと。チクロンBを投入するために、天井にいくつかの穴が「すみやかに」開けられたこと。10-15cmの厚さのコンクリートに穴をあけることは、短時間でできる仕事ではない。</u>ヘスは、自分の収容所が能力以上に膨張したことが</p>
--	--

<p>これについて、ヘスは次のように述べている。 「私は900名のロシア人のガス処刑を明白に覚えている。それは、ブロック11の使用が非常に多くの困難を引き起こしていたので、すぐあとに、古い焼却棟で行なわれた。われわれが行なったことは、死体安置室を覆っていた土とコンクリートに穴を開けて、いくつかの穴を作ることだけだった。ロシア人は前室で、服を脱がなくてはならなかった。次に、彼らは、害虫駆除を受けるといわれていたので、死体安置室に穏やかに入った。移送集団全員が完全に死体安置室に入りきった。 ドアが閉じられ、穴からガスが投げ込まれた。彼らを殺すのにどのくらいかかったのかわからない。しばらくのあいだ、話し声のような音が聞こえた。ガスが投げ込まれると、悲鳴があり、囚人が2つのドアに殺到した。しかし、ドアはびくともしなかった。」<sup>27)</sup></p>	<p>らくるとてつもない任務に厳格に対応して、「特別行動」に参加した。そして、自分の良心が道徳的問題に関与することを許さなかった。彼は、見ることなく、現場にいたのである。私見では、この態度のために、自伝に散見される不作為の誤りが生まれたのである。<sup>28)</sup></p>
<p>焼却棟でガス処刑されるはずの犠牲者は、夕方遅くか早朝に列車か自動車で収容所に運ばれてきた。列車の場合、犠牲者は収容所に隣接したホームで降車し、運命の場所まで歩いていった。 ヘスは回想録の中で、ソ連軍捕虜の最初のガス処刑について次のように書いている。 「私は900名のロシア人がガス処刑されたことを明白に覚えている。ブロック11のガス処刑目的での使用が非常に多くの困難を引き起こしていたので、すぐあとに、古い焼却棟で行なわれた。移送集団の積み降ろしが行なわれているあいだ、穴が、死体安置室の土とコンクリートの天井にあけられた。ロシア人は前室で、服を脱ぐように命令された。次に、彼らは、害虫駆除を受けるといわれていたので、死体安置室に穏やかに入った。すべての移送集団は、正確に死体安置室の容積を満たした。その後ドアが閉じられ、屋根の穴からガスが投げ込まれた。この殺人がどのくらいの長さ続いたのか知らない。しばらくのあいだ、うめき声を聞くことができた。丸薬が投げ込まれると、『ガス!』という悲鳴があった。大きなとなり声が出て、囚人は2つのドアに殺到した。しかし、ドアはびくともしなかった。数時間後に、換気をするためにドアが開けられた。」<sup>32)</sup></p>	<p>[ ファインジルベルク、ミュラー、ブロードの証言によると ]、天井には1つか2つの排気扇が設置されていたらしい。<sup>29)</sup></p> <p>焼却棟は、1940年11月から1943年7月まで焼却施設として機能した。ガス室は1941年末から1942年まで散発的に使われたが、正確な日付はわからない。<sup>30)</sup></p>
<p>換気システムのために必要な資材と技術を持っていたので、ボース社はそれを2月23日から3月1日のあいだに建設した。ゲシュタポのSSペリー・ブロードはそれについて、「(焼却棟の)屋根からでている大きなカーブしたパイプそれは、大きな騒音をカットする、...焼却室(と死体安置室)の空気を清浄にするために設計された換気装置、...死体安置室の天井には換気扇があった」と記している。われわれが検証した新建設局の青写真は、ブロードの記述を確証している。<sup>31)</sup></p> <p>焼却棟の死体安置室が、もっと効率的なガス室として推奨された。そこは、毒ガスを排気することのできる機械的換気システムを備えており、1階の構造になっているので、屋根に作られた3つの穴からチクロンBを投入することが容易であった。焼却棟の死体安置室のなかの新しいガス室は、1942年1月から5月までに断続的にうまく作動した。5月には、第三の炉を建設するために閉じなくてはならなかった。<sup>33)</sup></p> <p>1942年1月:「狂信的な」共産主義者と不治の患者をチクロンBの投入によってもっと簡単に清算することを継続できるようにするために、焼却棟の換気装置のついた死体安置室をガス室に改造。散発的に4月末まで稼動した。<sup>34)</sup></p>	<p>換気システムのために必要な資材と技術を持っていたので、ボース社はそれを2月23日から3月1日のあいだに建設した。ゲシュタポのSSペリー・ブロードはそれについて、「(焼却棟の)屋根からでている大きなカーブしたパイプそれは、大きな騒音をカットする、...焼却室(と死体安置室)の空気を清浄にするために設計された換気装置、...死体安置室の天井には換気扇があった」と記している。われわれが検証した新建設局の青写真は、ブロードの記述を確証している。<sup>31)</sup></p> <p>焼却棟の死体安置室が、もっと効率的なガス室として推奨された。そこは、毒ガスを排気することのできる機械的換気システムを備えており、1階の構造になっているので、屋根に作られた3つの穴からチクロンBを投入することが容易であった。焼却棟の死体安置室のなかの新しいガス室は、1942年1月から5月までに断続的にうまく作動した。5月には、第三の炉を建設するために閉じなくてはならなかった。<sup>33)</sup></p> <p>1942年1月:「狂信的な」共産主義者と不治の患者をチクロンBの投入によってもっと簡単に清算することを継続できるようにするために、焼却棟の換気装置のついた死体安置室をガス室に改造。散発的に4月末まで稼動した。<sup>34)</sup></p>

コーゴンたちの『ナチスの大量殺戮』もピペルも、焼却棟の「ガス室」について、ヘスの証言をそのまま無批判的に紹介しているだけである。ただし、奇妙なことに、コーゴンたちの引用には、ピペルの引用にある「移送集団の積み下ろしが行なわれているあいだ」という箇所がない。また、「ドアがびくともしなかった」のあとには、「数時間後に、換気をするためにドアが開けられた」という文が続くはずであるが、コーゴンたちの引用は、「ドアはびくともしなかった」で終わってしまっている。ヘスの文章についての両者の脚注を見ると、コーゴンたちは、アウシュヴィッツ博物館所蔵のオリジナル・テキスト、ピペルは、1961年に出版された英訳の *Commandant of Auschwitz* (London, 1961) を使っている。本来ならば、コーゴンたちの使用したオリジナル・テキストにあたるべきなのであろうが、残念ながら、筆者には今のところその能力がない。しかし、このオリジナル・テキストを所蔵しているアウシュヴィッツ国立博物館が出版している『SS隊員の目から見たアウシュヴィッツ収容所』の英訳版には、当該箇所は次のようになっている<sup>35)</sup>。

I have a clearer recollection of the gassing of nine hundreds Russians which took place shortly afterwards in the old crematorium, since the use of Block 11 for this purpose caused too much trouble. **While the transport was detraining,** hole was pierced in the earth and concrete ceiling of the mortuary. The Russians were ordered to undress in an anteroom: they then quietly entered the mortuary, for they had been told they were deloused. The whole transport exactly filled the mortuary to capacity. The doors were then sealed and the gas shaken down through the holes in the roof. I do not know how long this killing took. For a little while a humming sound could be heard. When the powder was thrown in there were cries of 'Gas!', then a great bellowing, and the trapped prisoners hurled themselves against both the doors. But doors held. **They were opened several hours later, so that the place might be aired.**

「移送集団の積み降ろしが行なわれているあいだ」という箇所が、この英訳版には存在する。コーゴンたちは、死体安置室のコンクリートの天井にチクロンB投下穴を開ける作業を「移送集団の積み降ろしが行なわれているあいだ」に行なうことが物理的に不可能なことに気づいたために、この箇所を削除してしまったのであろうか<sup>36)</sup>、それとも、この箇所はオリジナル・テキストには存在していないのであろうか。また、「数時間後に、換気をするためにドアが開けられた」という部分が引用されていないのは、焼却棟の死体安置室には換気装置が設置されていたという断定と矛盾してしまっているからであろうか。

また、ピペルも、プレサック論文と同じ論文集に収録されていながらも、彼の説との矛盾の調整をはかるうともせず、「数時間後に、換気をするためにドアが開けられた」という箇所をそのまま引用することですませている。ピペルは、科学的・化学的・法医学的アプローチに無関心ひいては無能力な伝統的ホロコースト史学の枠内にとどまっているために、ことの深刻性に気づいていないのであろう。

これに対して、プレサックは、78.2 m<sup>2</sup>「ガス室」に900名を詰め込むことが物理的に不可能である、チクロンBの投入口を死体安置室の天井に、「移送集団の積み降ろしが行なわれているあいだ」に開けることも物理的に不可能であるという、ホロコースト修正派の観点からするとごく当然な疑問を呈している。そして、このヘスの証言は、少なくとも、焼却棟の「ガス室」に関する箇所は虚偽であるというのが論理的な結論となるであろう。しかし、そのような論理的結論を受け

入れてしまっは、ヘスの証言を非常に重視するホロコースト正史の土台を揺るがせることになってしまうので、ヘスは「見ることなく、現場にいたのである」との「苦渋の」解釈を行なっている。

また、「数時間後に、換気をするためにドアが開けられた」という箇所も、「殺人ガス室」の実態を解明する上では、きわめて深刻な問題をはらんでいる。換気装置がなく、ドアや窓を数時間開放する自然換気では、ベルト・コンベア式の「大量ガス処刑」は不可能だからである。ホロコースト修正主義的なアプローチの影響を受けているプレサックは、問題の深刻性に気がついており、『技術と作動』では、みずからその信憑性に疑問を呈しているブロード証言を援用しながらも、焼却棟には換気システムが存在したらしいとの憶測を述べ、『大量殺戮装置』では、「機械的換気システムを備えて」といたと断定するようになっている。

結局、プレサックは、ヘス、ブロード、ミュラー、ファインジルベルクの証言にある矛盾点を指摘しつつも、ここから出てくる論理的結論、すなわち、焼却棟のガス室に関する彼らの「目撃証言」には信憑性がないという結論を避けるために、次のように述べている。

「これら4人の証人の話にどのような批判を加えることができるとしても、全員が一つの同一の事実、すなわち、焼却棟の死体安置室で殺人ガス処刑が行なわれたという事実を確認している。彼らの話が、チクロンBが投入された穴の数について、排気ファンの数についてはまちまちであるけれども、実際に設計・設置されなければ、記憶されないものであるので、犯罪目的に死体安置室を利用したことは確認されている。」<sup>37)</sup>

4人の「目撃証言」は、たがいに矛盾をはらんでおり、科学的＝化学的観点からしても疑問の余地を抱えているけれども、少なくとも、焼却棟の死体安置室でガス処刑が行なわれたことについては一致して証言しているので、焼却棟の死体安置室ではガス処刑が行なわれたというのである。

## 2.2. ガス室に改造された農家ブunker 1について

ホロコースト正史では、ビルケナウの焼却棟、<sup>38)</sup>、<sup>39)</sup> が稼動する前に、農家を改造したブunker 1とブunker 2が臨時的「殺人ガス室」として機能したという。しかし、このブunker 1には、現存する廃墟もなく、その建物についてのドイツ側文書、設計図も存在しない。プレサックによれば、「ブunker 1の跡はまったく残っていない。それは、1942年末か1943年初頭に解体された。この臨時的施設に関して現存している情報は乏しく、数名の生存者の証言だけにもとづいている」という状態である。すなわち、物的・物理的証拠、文書資料的証拠が欠落しているという状態のなかで、ブunker 1の実在は、ひとえに目撃証言 プレサックによると2名のSS隊員（ヘスとブロード）、4名の囚人（ドラゴン、ペンルビ、プキ、ガルバルツ）の信憑性の評価にかかっているのである。

ガス室を備えた2つのかやぶき屋根の農家のうち、1つは1942年1月に、もう1つは同年1942年6月末に稼動した。それらは、ブンカー1、ブンカー2と呼ばれた。前者は1942年末に解体された。後者は1944年秋まで使われ、1945年初頭にSS隊員によって破壊された。しかし、その廃墟は残っており、その大きさを知ることができる。長さ15m幅7mほどであり、ヘスのいうところの「古い焼却棟」の部屋よりもわずかに大きかったことになる。床面積は105㎡（1134平方フィート）であった。

シュラマ・ドラゴンは1945年5月10日に証言したときに、2つの建物についての大雑把な図面も提供している。…ブンカー1には2つのガス室があり、それぞれに1つのドアがあった。ブンカー2には4つの部屋があり、一方の側に入り口ドアが、その反対側に、死体が運び出されていくもう1つのドアがあった。最大の部屋には2つの小さな窓があり、それ以外の3つの部屋には窓は1つしかなかった。

明らかに、このブンカーについてのドラゴンの図面はバランスを失っている。実際の大きさは廃墟によって示されており、前述したとおりである。ドラゴンは供述書のなかでもう一つの誤りをおかしている。移送者はブンカーから少し離れた木造バラックで服を脱がなくてはならなかった。ブンカー1には2つの脱衣バラックが、ブンカー2には3つの脱衣バラックがあった。ドラゴンはこの数字を反対にして、ブンカー1には3つ、ブンカー2には2つのバラックがあったと述べている。

以下は、ペリー・ブロードが、疑いもなく直接目撃したことにもとづくブンカーについての記述である。…<sup>38)</sup>

最初のガス室が設置されたこの建物はSS隊員によってブンカー1と呼ばれていたが、アイヒマンがはじめてアウシュヴィッツを訪問した前年に、この目的のために目をつけられていた。煉瓦の屋根を持った（「赤い小屋」という別称の由来）漆喰の塗られていない建物であった。長さ15m、幅6.3mであった。改築の一部とし

「[ブンカー2から]500m [実際には800メートル]離れたところに、ブンカー1と呼ばれたもう一つの小屋があった。これは、二つの部分に分けられた小さな煉瓦の家であり、2000名の裸の人々を収容することができた。」[証人による明らかな誇張であり、それは、実際には、初期のすべての話に見られる傾向である。ヘスは800名という数字を挙げている。彼は、死の『技師』として、自分が何を話しているか知っていた。もっとも、彼も、『プロのプライド』から、数字を水増ししようとしているが]。<sup>39)</sup>

私は、記憶のためにだけ、PMOが刊行した『SS隊員が見たアウシュヴィッツ』のなかの『ペリー・ブロードの陳述』を引用しておく。歴史的には、この話は、その『真実』らしい、また『驚くべきような』雰囲気にもかかわらず、その現在のバージョンのままでは、利用できないものである。それは、ポーランド人によって、ポーランド人のためにリライトされており、1945年12月14日の資料NI-11397は、この『陳述』が持っていたに違いない正確なトーンのはかない印象を与えているだけである。イギリス情報局に提出され、ポーランド版の『陳述』のもとになった、1945年6月13日の有名な話についていえば、文書館主任が、PMOはオリジナルを所有しておらず、それはイギリスにあると考えられていると私に確言した。私は、1945年6月13日の元々の話の写真コピーさえも見ていないので、翻訳者のヘレナ・ディジンスカがドイツ語の『オリジナル』を見たかどうか疑っている。博物館はそれを所有していないからである。さらに、ペリー・ブロードは、そのオリジナルな話の中でさえも、絶滅施設の貧弱な観察者にすぎなかったのではないかと考えている。…

ブロードの証言は、収容所での数少ない驚くべき出来事を時間的に記録しているにすぎず、ブンカーと焼却棟の詳細については情報を提供できていない。その信用性を評価すれば、良心的な歴史家であるならば、『陳述』からポーランド人の影響がはがされるまで、オリジナルが

<p>て、窓は閉じられた。小さな開口部だけが残されたが、その端はフェルトで閉じられることができた。内部の部屋の数は、4つから2つに減った。各部屋にはドアがあり、「害虫駆除へ」という標語がついていた。ドアは木造であり、端はフェルトで閉じられていた。のぞき穴はまったくなかった。ドアは、ドアハンドルとして二重になっている二つのボルトを締めることによって閉じることができた。二つの部屋の内壁は、白く塗られており、床はおがくずでしきつめられていた。建物の周囲には果実の木が植えられていた。改築作業のときに建設されていた納屋とバラックが隣接していた。</p> <p>ブンカー2が稼動し始めたのは、数ヶ月後のことであった。それは、漆喰の建物の中にあつた（それゆえ、「白い部屋」と囚人に呼ばれていた）。ブンカー1よりも大きく、長さ17.07m、幅8.34mであった。最初の建物と同様に、その窓は閉ざされており、木造の板でカバーされた小さな開口部だけがついていた。様々なサイズの4つの部屋があり、おのおのに入り口と出口がついていた。ドアはブンカー1のドアと同様である。改築作業の一部として、木造の天井が、コンクリートの天井に変わった。<sup>41)</sup></p>	<p>公表されるまでは、それを利用することはできないであろう。<sup>40)</sup></p>
---	---

実は、6名の証言には数多くの矛盾がある。たとえば、建物の外観：「小さな煉瓦の家」(ドラゴン)、「2つの大きなコンクリートのブロック」、「3方向を閉ざされた納屋のようなもの」(ガルバルツ)、ブンカー1の収容人員：2000名(ドラゴン)、800名(ヘス)、ブンカー2のガス室の数：4つのガス室(ドラゴン)、5つのガス室(ヘス)であり、プレサックも「すべての話を総合することは不可能である」<sup>42)</sup>と断定している。

コーゴンの『ナチスの大量殺戮』も「目撃証言」のあいだの食い違いに気づいており、たとえば、ドラゴン証言のあやまちを指摘しているが、「目撃証言」全体の信憑性には疑問を呈していない。また、ピベルも、これらの目撃証言に依拠して、ブンカー1やそこでのガス処刑について記述しており、その面積や収容人員をのぞいて、これらの証言の信憑性については疑問を呈していない。

これに対して、プレサックは、個々の証言の矛盾を正確に指摘している。

とくに、対照的であるのは、ペリー・ブロード証言の評価である。コーゴンたちは、彼の証言を「直接目撃したことにもとづく」ものとして高く評価している。これに対して、プレサックは、「それは、ポーランド人によって、ポーランド人のためにリライトされており」、「ブロードは、そのオリジナルな話の中でさえも、絶滅施設の貧弱な観察者にすぎなかった」、「その信用性を評価

すれば、良心的な歴史家であるならば、『陳述』からポーランド人の影響がはがされるまで、オリジナルが公表されるまでは、それを利用することはできないであろう」という表現に見られるように、その信憑性に重大な疑問を呈している。つまり、プレサックは、少なくとも、ブンカー1については、物的・物理的証拠＝ゼロ、文書資料的証拠＝ゼロ、目撃証言＝その信憑性ゼロと判断しているのである。

だとすれば、当然、ブンカー1の歴史的事実性も限りなくゼロに近いというのが論理的結論になるはずであるが、プレサックは、やはり、ホロコースト正史の土台を揺るがしてしまうことになるこの論理的結論を避けるために、次のように述べている。

ヘスが記した場所の図面以外には、設計図はまったく存在せず、ブンカー1は注意深く解体され、まったくその痕跡を残していない。物質的な痕跡、場所[資料2]、内部構成[資料1]なしには、ブンカー1の配置とそのさまざまな付属物は、まったく明らかとはならないであろう。しかし、悪意を持った修正主義者のように、SS隊員も含む証人はすべて嘘をついているのであると主張しない限り、囚人たちの話は、ガス処刑については、同一の手順を絶えず繰り返しているので、ブンカー1の目的、すなわち、ガス処刑による人間の絶滅については、疑問の余地はない。<sup>43)</sup>

## 終わりに

伝統的ホロコースト史学は、ホロコーストの具体的局面、とくにアウシュヴィッツなどの強制収容所の「殺人ガス室」、「大量ガス処刑」についての物的証拠、文書資料的証拠の欠如という事態を、「秘密」＝「カモフラージュ」説(ナチス・ドイツはすべての犯罪を外部世界にもれないように実行し、実行後はその犯罪の痕跡、死体や凶器などをすべて消し去ってしまった)、「コード言語」説(関係者は犯罪を実行するにあたっては、たとえば、「特別措置」のような「婉曲語法」を使って、犯罪の文書資料的痕跡を残さないようにした)という方法をつかって弁明し、本来ならば、物的証拠、文書資料的証拠がなければその「事実」自体の歴史的事実性が疑わしいという論理的かつ歴史学的結論を回避しようとしてきた。このために、伝統的ホロコースト史学は、「殺人ガス室」、「大量ガス処刑」の存在性の検証ではなく、これを「目撃した」と証言する「目撃者」の「目撃証言」をたんに紹介することに終始せざるをえなかった。そして、ホロコースト修正主義的な研究者から、「殺人ガス室」、「大量ガス処刑」に対する技術的・化学的・法医学的批判が提起され、さらに、よりどころである「目撃証言」に含まれている数多くの矛盾を指摘されると、伝統的ホロコースト史学がとった立場は、技術的・化学的・法医学的批判については無視すること(「起こったから、技術的に可能だったのである」)、および、「目撃証言」については「証言の収斂」理論であった。すなわち、「目撃証言」にはさまざまな食い違いや矛盾があるけれども、それは些細なことであり、すべての証言は、「殺人ガス室」が存在したことに、「大量ガス処刑」が行なわれたことに「収斂」しているというのである。

プレサックは、この伝統的ホロコースト史学の方法にきわめて批判的であるが、ホロコースト正史派の研究者として、その批判がホロコースト正史の枠組み事態への批判に行き着いてしまうことを何とか回避しようとして、きわめて非論理的かつ「苦しまぎれな」資料操作・解釈＝「苦闘」を行ない、「目撃証言」の信憑性については、伝統的ホロコースト史学の最後のよりどころ＝

「証言の収斂」理論にうったえざるをえなくなってしまった。

しかし、一方では、彼の研究からは、自分の資料操作・解釈が「苦しまぎれな」ものであることを十分に自覚している知的煩悶＝知的誠実性もうかがえる。そして、当初、ホロコースト修正主義を批判する第一人者としてもはやされたプレサックが、伝統的ホロコースト史学のあいだで、次第に「継子」扱いされ、疎んじられるようになっていったのも、その知的誠実性ゆえであろう。

- 1) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, New York, Beate Klarsfeld Foundation, 1989.
- 2) Jean-Claude Pressac, *Les Crématoires d'Auschwitz. La Machinerie du meurtre de masse*, 1993.
- 3) Jean-Claude Pressac, *Die Krematorien von Auschwitz/Die Technik des Massenmordes*, Munich/Zurich, 1994.
- 4) Jean-Claude Pressac with Robert-Jan Van Pelt, "The Machinery of Mass Murder at Auschwitz", Yisrael Gutman and Michael Berenbaum, *Anatomy of the Auschwitz Death Camp*, Indianapolis, 1994.
- 5) 拙稿, 「第二次大戦に関する歴史的修正主義の現況(3) プレサック論文「アウシュヴィッツでの大量殺人装置」批判」(文教大学教育学部紀要第39集)1999年, 「第二次大戦に関する歴史的修正主義の現況(5) 再考: プレサックの「犯罪の痕跡」」(文教大学教育学部紀要第41集)2001年を参照していただきたい。
- 6) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder, A Documentary History of the Use of Poison Gas, New Haven and London*, 1994. 本書は, 1986年に刊行されたE. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nationsozialistische Massentötungen durch Giftgas*, Frankfurt, 1986の英訳版である。したがって, プレサックの著作よりも前に刊行されている。
- 7) Ibid, p. 3.
- 8) ほぼ。唯一の例外とみなされているのが, ビルケナウの焼却棟の地下に Vergasungskeller (ガス処理室) なる部屋が存在していることを示唆する1943年1月29日づけのアウシュヴィッツ建設局長ビショフの書簡であり, ニュルンベルク裁判以来, ホロコースト正史派の文献には, この書簡が, 焼却棟と「殺人ガス室」実在していたことを示す「決定的」証拠として繰り返し登場する。しかし, Vergasungというドイツ語の単語は, ガスを使った害虫駆除作業ではごく一般的に使われていた単語であり, 害虫駆除室は Vergasungsraumとか, もっと簡単に Gaskammer (ガス室) と呼ばれていた。しかも, 焼却棟の地下室は, 臨時の害虫駆除室としても使用されていたので, Vergasungskeller が「殺人ガス室」の存在を立証する「決定的」証拠とはなり得ない。
- 9) ヒトラーのユダヤ人絶滅命令が実在したかどうかをめぐる, 伝統的ホロコースト史学のあいだでの混乱を参照していただきたい。
- 10) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder*, p. 5.
- 11) R. J. van Pelt, *The Case for Auschwitz: Evidence from the Irving Trial*, Bloomington, 2002.
- 12) Ibid, p. 209.
- 13) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p.247.
- 14) Ibid, p. 213.
- 15) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder*, p. 8.
- 16) Jean-Claude Pressac, *Les Crématoires d'Auschwitz. La Machinerie du meurtre de masse*, p. 35. Jean-Claude Pressac, *Die Krematorien von Auschwitz/Die Technik des Massenmordes*, S. 44-45.
- 17) Jean-Claude Pressac, *Les Crématoires d'Auschwitz. La Machinerie du meurtre de masse*, p. 114. Jean-Claude Pressac, *Die Krematorien von Auschwitz/Die Technik des Massenmordes*, S. 153.
- 18) R. Hilberg, *The Destruction of the European Jews*, NY., London, 1985, p. 166. ラウル・ヒルバーク, 望月その他訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(上)(下), 柏書房, 1998年, 304頁。

- 19) R.Hilberg, *The Destruction of the European Jews*, NY., London,1985, p. 167. ラウル・ヒルバーク, 望月その他訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(上)(下), 柏書房, 1998年, 307頁.
- 20) R. J. van Pelt, *The Case for Auschwitz*, p. 41.
- 21) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder*, pp. 160-161.
- 22) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p. 188.
- 23) Jean-Claude Pressac with Robert-Jan Van Pelt, “The Machinery of Mass Murder at Auschwitz”, p. 215.
- 24) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder*, pp. 3-4.
- 25) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p. 264, 429.
- 26) Ibid, p. 123.
- 27) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder*, pp. 146.
- 28) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p. 127.
- 29) Ibid, p. 132.
- 30) Ibid.
- 31) Jean-Claude Pressac with Robert-Jan Van Pelt, “The Machinery of Mass Murder at Auschwitz”, p. 193.同様の記述が, Jean-Claude Pressac, *Les Crématoires d’Auschwitz*, p. 18. Jean-Claude Pressac, *Die Krematorien von Auschwitz/Die Technik des Massenmordes*, S. 22.にある.
- 32) Franciszek Piper, Gas Chamber and Crematoria, Yisrael Gutman and Michael Berenbaum, *Anatomy of the Auschwitz Death Camp, Indianapolis*, 1994, pp. 159-160.
- 33) Jean-Claude Pressac with Robert-Jan Van Pelt, “The Machinery of Mass Murder at Auschwitz”, p. 209.
- 34) Jean-Claude Pressac, *Les Crématoires d’Auschwitz*, p. 114. Jean-Claude Pressac, *Die Krematorien von Auschwitz/Die Technik des Massenmordes*, S. 153.
- 35) *KL Auschwitz seen by the SS*, The Auschwitz-Birkenau State Museum, Oświęcim, 1998, p. 71.
- 36) ホロコーストの「目撃証言」には, 明らかに物理的に不可能な記述があるが, 伝統的ホロコースト史学は, その部分を削除もしくは訂正して, 読者に紹介することが多い.
- 37) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p. 128.
- 38) E. Kogon, H. Langbein, A. Rückerl, *Nazi Mass Murder*, pp. 147.
- 39) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p. 161.
- 40) Ibid, p. 162
- 41) Franciszek Piper, Gas Chamber and Crematoria, p.161.
- 42) Jean-Claude Pressac, *Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers*, p. 165.
- 43) Ibid.